

こと」に従って生きた結果、「こんなはずじゃなかった」「もうたくさんだ」と後悔に苛まれているのです。

「本当にやりたい」と思っている内容が、時期によって変化することを織り込んでいることが、『弱キャラ友崎くん』の言葉を真に迫ったものになっています。心から「本当にやりたい」と思っているとしても、それは簡単に変化します。知識や経験が少なく、想像できる範囲が狭いときは特にそうです。

自己啓発文化は、「本当にやりたいこと」がたった一つの真実としてどこかに必ず定まるはずだと暗に想定していますが、そのような見解は、自分の多様性を押し殺すだけでなく、こうした時間的変化の可能性をなかつたことにしています。このことを考慮すれば、「自分の心に従う」ことがいつでも適切なわけではないというのは確かでしょう。

それに、ステイヴ・ジョブズについてよく知る人なら、彼が当初はAppleやコンピュータインダストリーにそれほど情熱を感じていなかったことを知っているはずで、当時のジョブズが「本当にやりたかつたこと」は、日本に来て禅の僧侶になることで、当初は仲間のステイヴ・ウォズニアックに誘われてしぶしぶ起業に取り組んでいました。だから、彼のテクノロジへの情熱が花開いたのは、実際に仕事に取り組んだ「後」なのです。^{*129}

ジョブズ自身、他者の視点をノイズとして排除したわけでも、「自分の内なる声に従って」キャリアを決めたわけでも、自分の内面にだけ関心を向けて天職に出会ったわけでも

*129 倫理学者のウィリアム・マツカスギルは、次の本の中でジョブズの実際の経験と語りのズレについて論じています。

千葉敏生訳「効果的な利他主義～宣言!…慈善活動への科学的アプローチ」みずす書房、2018、160頁